

岩波文庫

3522—3524

ベルリ提督

日本遠征記

(一)

土屋喬雄 訳
玉城 肇



岩波書店

解説

本書は、ベルリ提督が一八五二年（嘉永五年）、一八五三年（嘉永六年）、及び一八五四年（安政元年）の三度に亘つて支那の諸海域及び日本に來航した記録の翻譯であつて、その記録は、同提督が合衆國に歸還後、Narrative of the Expedition of An American Squadron to the China and Japan etc. と云ふ標題で公刊された。この報告は、ベルリ提督及び乗組士官達の覺書、日記を提督の要求に基づき、その監督をうけて、フランシス・L・ホークスの編纂したものである。

この記録は合衆國の第三十三議會第二開期中に特殊刊行物第九十七として、一八五六年春に印刷にとりかゝり、合衆國印刷局に於て數十冊を紙表紙綴四巻として出版したが、その後、ワシントンの一印刷業者によつて刊行されることになった。

一九五五年、マルコ・ポロがアジアに於ける長い滞在からヴェニスに歸つたとき、ヨーロッパ人に、多くの不思議についての物語をした。この物語は彼等の輕信を刺戟したのであつたが、その後も長く確信されてゐたものである。その諸々の不思議のうち、カタイ（Cathay）（支那）の沿岸を遙に離れて、一つの大きな島が存在してゐると云ふことがあつた。その島をジバング（Javanica）と呼んだ。この島とは、日本王國たる現在の日本島である。彼はまた、ジバング人の不撓の勇氣の物語をし、且つ彼等が、當時の全アジアの征服者にしてヨーロッパの脅威たる強力な忽必烈汗の軍隊を、如何にしてうまく防禦したかも知つた。彼は人々の面前に、自ら製作して持ち歸つた地圖を擡げた。その地圖には黃海の沿岸線の上に『東方に、あたつて、一大島あり』と記されてゐた。何年か過ぎた。マルコ・ポロの物語と地圖とは、ゼノアに傳はり、多分忘れられてゐたであらう。遂に十六世紀に、それが或る人の手に歸した。この人はそれを無駄に棄て去りはしなかつた。その人と云ふのはクリストファー・コロンブスであつた。そこで彼の牢固たる心は、ヨーロッパの西方にあたつて、當時全く知られてゐない大陸があるに違ひないと云ふ、一生一代の確信に到達したのであつた。彼の推測・動かす可らざるものにしたのは、マルコ・ポロの地圖と、特にジバングに關するその記述とであつた。コロンブスが出帆したとき、航海の末に發見するだらうと望み豫期したのは、ジバング、即ちマルコ・ポロのイタリア語手記によればチパンゴ（Cipango）だつたのである。それだから（吾々が知つてゐる通り）彼がキューバに上陸した時には、長く心に抱いてゐた希望の目的地に到達したのであると信じたのであつた。ヨーロッパからジバングに到る間に、一大陸が横たはつてゐることを知らなかつたし、その大陸より更に尙西方には、巨大な大洋がうねり、ジバングに達するには、そこを過ぎなければならぬと云ふことも知らなかつた。

彼自身は、キリスト教國のために日本を發見するため及び日本を開國するために赴いたのである。はなかつたのであるが、彼が發見した大陸、彼が求めてゐた國への途中に横たはつてゐた大陸を基礎として、神意によつて一國が成立し、この國が、圖らずも、彼の企圖した事業の一部分を遂行し、また、西方へ彼を誘惑した計畫の少くとも一部を完成することとなつたのである。この一國家は、ジバングを發見したのでないとするれば、世界各國との完全にして自由な交通をなさしめる道具となつたのだと私は信ずる。その一國家は、事實アメリカの沿岸に於てコロンブスの手の中で斷れた糸の端をとり上げて、それを再び運命のボールに結びつけ、そのボールを轉がし續けて、自ら解けるまゝに、偉大なゼノア人が發見した國の土人と開化した住民をして、彼の探し求めてゐた遙なる國土に足跡を印するに至らしめ、斯くして、ジバングをヨーロッパ文明の勢力範圍にひき入れようとする彼の望みを満たしてやつたのである。